特別
~4
7328

52-9828

三十六人哥合　弘長二年

右

三品親王　宗尊

晴るゝ夏身の置こゝちかな

かすみ消月はやゝ秋の雲

右

兼家大臣　基家

明るゝ夏の月影

三十六人哥合　弘長二年

左　三品親王　宗尊

晴るゝ夏身の暑こゝろ思ひ知れ
かすめる月も秋や待ぬ

右　前大僧正　基家

明ぬるとたのまぬ月の新
しき人ぞ待やすらん

左　入道前太政大臣　實氏公

分殺ぬ人ぞ恨ぬ
ぬれば春の夢ぞ覚る

右　衣笠前内大臣

夏草の露の
身はわけ玉のゝ
ゝ

左　関白前左大臣　良實公

玉川のさゝ
まちたる表
ゝ

右　沙弥頼恵　伊平公

[illegible]

右

関白前左大臣　良経公

玉川あさせ山ぶきの
はなさかりまちけるあめ

右

沙弥蓮恵　仲平卿

[illegible]原こえ菖蒲
風のまに右なる燈火の影

右

前横川左大臣　実綱公

[illegible]
雲ちかくなる志賀の[illegible]

右

土御門院小宰相

あすしらぬ我身なれども桜花
[illegible]

右

前太政大臣　公相公

[illegible]
[illegible]

右

[illegible]
[illegible]

右

権大納言通成

[illegible]
[illegible]

秋の夕むらさめ過ぬ

右　　左大将資雅

いく秋かなれぬる月の又ながらぬ世にくもりなき

さ

時雨ふる山のあなたの

秋しをたのかりがねの

右　　三位親子家小将

立ちかへり命の中のさきの事

わすれぬる所ぞ忘れむ

左　　九條前内大臣

おほ空よりはるかに風の吹しく

雲ぞ忘れぬ

右　　鷹司院帥

むらさめの雲ぬ

ふるさとの

左　　前権備前守藤貞

三笠山のあなたの

かくてすぎにしものや思ふ

くらす世をやなれぬるかな

右　前権備前守藤原

一夜のかりのやどりの山のの道の草葉

かくてさ花よりものや思ふ

右　備前守隆弁

富士の根のはるけさまさるなるまでも

雪ぞ消ぬらぬやはらるか

右　沙弥縁空　基長

山のくれぬはるさいりやのうすみ

雪ぞまもはるあるの月の

右　沙弥如寂　具親

はるをまつ新をまこふ光をて

時雨ぬ山のやまの月

さ　前大納言資季

高めゆしし紅葉やさそはれん

花をを言ふる山のさ

右　藤原基政

あをとこ山ぬ花をまきれる

言くはをとして　地忘して

右　皇后宮大夫師継

花を尋ぬる庭の山かさ

右　藤原基政

あをとうの松をうゑそめしより
春くれぬとは思ひてし

右　留守左史師継

まさきはる時
小田の原をしたいそ逝

右　権律師公朝

五月雨は
井堤はあまるあのうら

右　桜宴使頭朝

はな花ちるやいつこなりけ
さ山吹ふかくそ

右　年長時

春をまちかほにむとてまいふかれ
雲まをくるる月新

右　中納言為氏

さつきこそ我
月まちあるとて

右　侍従朝家

雲まより出る春の月新

右　中納言為氏

さそはるる我にはあらぬまつの色の
月すむ空に秋風ぞふく

右　侍従前家

いかなれや方々あやまれるうら
何とまき秋世のありのすさまじ

右　源具氏朝臣

玉はかぎりなき代の始をも
春はいかなる色にかすらん

右　藤原雅経朝臣

むかしの花をわすれぬ春の神の
あるじや雲の山ぢ遠き

さ　法印賢俊

ある人のなさけの数に入ぬるは
はるのあさなる色をかなん

右　素蓮法師

奥ふかせてさそふ神を待ぬ
浦づたいもり　秋の末の月

右　沙弥寂西　信賢

はるかなる遠き昔の物がたり

右　素蓮法師

興法のせしき神を祈りて
浦づたいもり　秋の夜の月

右　沙弥妙西　信賢

雲まをそこにうりゆくきの
あつさ　ひたすらあつ　ひるの

右　平政村朝臣

たつく世の中　ひまの
別れ　ひぐやま　書き　捨て　法

右　院中納言

いとせちく　紅　ゆ　ゆ　球　ちと
たりてやんの　つまるる　ゆ

右　藤原門流少将

いつまも　ちの　まま　南　すく
拾　ま　ま　ひの　山

右　沙弥教賞　信記

ある　磯　ま　若　むを　ゆ　年　つる
いとかい　川　の　ゆ　ゆ　ゆ　法　る　浦

右　沙弥真願　光綱

拾遺集ハ春たちの山

左　沙孫勢賞　左兵衛

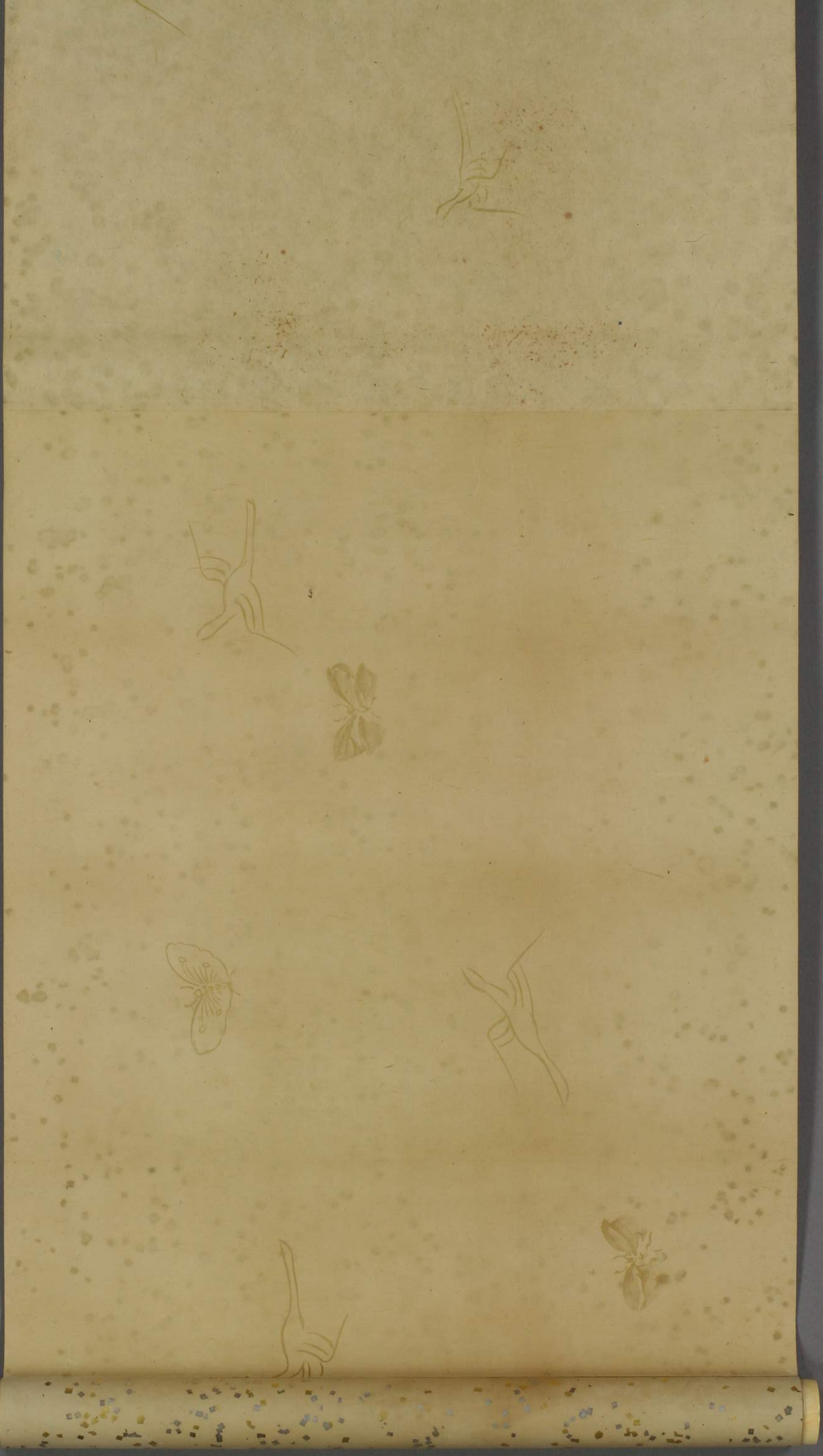
あゝ嶽よ若むらさきの年へる

いとかゝいの川のさゝ砂なる論ん

右　沙孫真觀　左兵衛

今きたるあゝ嶽ハ物しのやるまゝハ

砂なる歌つゝさゝとなるはし



特別
～4
7328